

【佳作】

真空

未踏のこころを背景に

わたしを見下ろす白い原稿
窒息しそうな無限のなかで
未来につながる息を吸う

はやけた像を結晶に
固める視点は多角的
細部に宿る解像度

わたしにとっての宝石は
あなたになんて映るでしょう

路傍に落ちてゐる石ころに
全てを見出すあの頃は
今は虚空も同じでしょう

意味を失うことばのなかに
偽の真空が広がった

窒息しそうな無のなかで
時間を進める、息をする

コメント

シサクヒンです。詩作品、試作品、思索貧……。

最近伝える方法がわからなくなりスランプになったので、それそのものをあえて形にしてみました。

書こうとしていることはわかっているのに、印象と構造の焦点が合わない。それらを縫い合わせられる一つの単語選びに馬鹿馬鹿しい時間を費やす。わたしにつながる言葉の束は、一方で誰かに通じているとは限らない。全部がローマなら良かったのに。などなど。

それに議題が誰かの目に留まることも情報過多の現在では難しいですね。その価値を理解してもらえないと同様に。目を引くようアクセントと悪戦苦闘するのも疲れてしまう。

自分の価値観を楽器として憎みます。が、それでも進まなければいけないこの空間を思い、この詩に込めました。きつとそれは、私一人だけのものではないです。

読んでいただけたのなら本当に幸いです。
届けるために描かれたものは、それだけで救われます。

経済学部 経済学科4年 三浦 庸平